

# Citrina 通信

キトリナつうしん  
No. 864



## 昆虫館に内堀福島県知事来館

Fukushima governor Uchibori visits the insectarium

■当昆虫館は今年の 3 月 23 日に、めでたくプレオープン  
の式典を終えて、一般公開となった。白河市や郡山市の大きな都市とは違い、福島県南の人口 5 千人の矢祭町に突然、昆虫館が生れたのは話題性があり、広く報道されたこともあり、土日祭日だけの開館にもかかわらず、7 週間で延べ 391 名の来館があった。町内はもとより、県南周辺や東京からも多数の来館者があったという。

■佐川矢祭町長も当館をととても自慢にしてくれて、隣町の棚倉町長を招いたりして、また菊池教育長も地元小中学生の理科教育の一環として生徒たちを見学に連

れてきてくれると言う。子供たちに虫の楽しさを実感してもらえるのは館としてもとても嬉しい。

■そのような中、福島県知事の内堀雅雄氏が連休明けの 5 月 7 日に来館されることになり、中江館長の代理で寺副館長がその案内役をすることになった。県の最高責任者がこの昆虫館まで足を運んで、展示を熱心に観られて真摯に説明を聴かれ、しかも専門的な鋭い質問をいただき、少々意外だった。長野県出身の知事は北杜夫の本は全て読まれたそうで、子供の頃に昆虫採集をやられていたようで標本へのまなざしは熱い。



左：視察後に関係者全員で内堀知事と佐川町長を囲んで記念撮影。中央のすらりと長身の方が内堀知事／右上：知事にイピタスタイマイの希少価値を説明する寺副館長／右下：最後に報道陣を前に昆虫館視察のまとめを話される知事

■その後展示物を前にして、知事や町長を囲んで館関係者と懇談の場が設けられ、実りある意見交換をした。この機会に知事にバーチャルでない実物の昆虫標本の価値を理解していただき、昆虫館の存在意義を認めていただいたのは意義深いと思う。

■説明に対しての内堀知事のレスポンスはととても虫の素人とは思えない、知識の広さと洞察力の鋭さに驚いた。特に最後に報道陣に向かって、今回の昆虫館視察

のまとめを述べられていたが、あれだけの短時間で正確に、標本と昆虫館の存在意義を理解され、「この昆虫館は福島の宝です」の言葉でしめくられたのは、館関係者としては嬉しいかぎりだった。

■これから今秋のグランドオープンに向けて、皆さんにはさらなる資金援助をお願いするとともに、晴れて本格開館を迎えるべく、身の引き締まる思いだった。

(虫の里福島奥久慈昆虫館副館長 寺章夫)

## 郷蔵(ごうぐら) Village storehouse



**古** 民家の所有者だった佐川家の一員の石射正曜氏(当館事務局長)が、母屋に1枚の木札が残っていたと見せてくれた。表には「郷蔵・掛札」とある(写真左) ■隣の棚倉町で明治4年建てられた古民家に住まれて、郷土史に詳しい石井義紀氏(虫の里設立の会会員)の説明では、郷蔵とは、寛政2年(1790)江戸幕府が飢饉対策として米、麦、稗などの穀物を貯蔵する蔵を各地に建てるよう命じたもので、この掛札は昆虫館の蔵の建設(明治29年1896)より古いものだろうとのこと ■また日本民家再生協会正会員で古民家に詳しい宗像智加枝氏は「このような古民家の由来を証明する掛札が残っていたのはとても珍しいことで、重要な歴史的資料です」とのことだった。

■石射氏が調べたところ、掛札の裏面(写真中)には「粃五拾六石八斗七〇尺〇 麦六斗〇升 稗〇九石八斗 御困穀 稗穀 辰四月三日 奥州白川郡小田川村(幕府代官)大竹左馬太郎(手代)本庄市三郎」とあ

り、この掛札は幕府が発行したいわゆる備蓄証明書とのこと。大竹左馬太郎という代官は、1840~60年代の幕末に生きた人のようで、1800年代の辰年は、1844年(弘化元年)、1856年(安政3年)などがある ■米1石は約150kgで当時の大人一人が1年間に食べる量の目安で、当時の小田川村の人口が50~60人だったと推測できる ■郷蔵を示す江戸時代の掛札が出てきたということは、今の蔵は江戸時代にあった蔵を、明治29年に建て直したものと考えられる。貫の跡等がある柱は、古い蔵の柱を再利用したものと思われる。

■蔵の中の木壁には「25年産大麦412俵、25年産精米120俵・」など白墨で書かれたメモが残っている(写真右) ■この蔵の建造は明治29年なのと、単位が「石」でなく「俵」となっていたり、漢数字でなくアラビア数字となっていることから、「25年」は「明治25年」よりも「昭和25年」の可能性が高い。とすると近年まで村の備蓄庫として使われていたようだ。

## 古民家再生 Restoration of traditional old house

**当** 初は旧佐川家古民家の土蔵は全て標本収蔵庫として使い、母屋で標本展示をする予定だったが、資金の関係でまずは土蔵の1階で標本展示を始めた。そして母屋を展示場として考えていたが、不特定多数の人が集まる施設ということで、建築基準法や消防法で排煙設備や内装制限、大規模な浄化槽の設置等とんでもない工事費がかかることがわかった。一番残念なのは排煙窓や排煙装置を設置することで、古民家としてありえない窓や装置が加わり、古民家本来の姿が損なわれることだ。

■悩んでいたところ、関係者から起死回生の名案が出された。「民泊・みんぱく」制度の活用だ。海外からの旅行者の増加で、ホテル・旅館不足を解消するために、国土交通省が打ち出した、普通の家にも旅行者を宿泊させてよいという、「民泊新法」だ。「民泊」だと旅館業法等の規制などを受けないで、ほとんど居宅のままで年間180日まで集客できるのだ。いわゆる公開型のホームステイだ。

■昆虫館は入館料を頂いたとしても、人件費や電気代等の維持費を考えると赤字施設であることは明白で、それを



維持するために母屋を民泊や展示場として貸し出すのはグッドアイデアだ。昆虫サークルや学校の生物部の夏合宿のための昆虫館併設の宿泊施設、あるいは昆虫館の特別展示場としても使える。いっぺんに現実的になった。

■そして、防災設備設置の制限を受けないために、大規模な改修工事の必要がなくなり、傷んだ箇所は補修やクリーニングで、出来るかぎり当時の姿に復元する改修方針が打ち出された。このことは改修コストの削減だけでなく、昭和の香りのする懐かしい田舎の大きな古民家が復活できて、かえってセールスポイントになり、一石二鳥だ。

■秋のグランドオープンに向けて、母屋の改修工事の打合せを工事関係者と行った。改修方針が決まると、全てが上手くゆく。柱時計や神棚はあえて取り外さずに残し、掘

り炬燵なども復活することにした。熟年の夫婦が昔を懐かしんでゆったりと泊まるもよし、気の合った複数の子供連れの家族でもよし、イメージが膨らむ。

■そのためにはオープンキッチンがよいとなったが、近代的なキッチンセットを組み込むのはコストもかかるし古民家らしくない。そこで大きな一枚板にシンクとIHコンロをはめ込むことにした。下はあえて扉などを付けずにオープン棚にしておけばコストもかからないし、一目で台所用品がわかる。

■基本コンセプトが決まると、あとは皆からどんどん楽しいアイデアが湧いてくる。早速、近所の押田製材所に、改修設計をお願いする一級建築士の大竹慎太郎氏と一緒に板材の下見に行った。

## 夢がふくらむ Growing dreams



**押** 田製材所は福島県南の山から伐り出される木材を製材加工する矢祭で三代続く老舗の材木問屋だ。とんでもない広さの敷地に歴史を感じずる加工場がいくつもあり、何人もの若衆がてきぱきと働いている。それをまとめる押田洋平社長もスニーカーに作業着姿で現場を仕切っているのが頼もしい。押田社長は特定非営利活動法人「まち・ひと・みらい」の理事長で、目指すところがこの昆虫館の建設理念と同じで、今回の改修工事でも全面的に協力してくれるとのありがたいお言葉を頂戴している。

■押田社長の案内で、大竹氏と場内のあちこちに置いて

あるキッチンカウンター用の材を見たが、桜の幅 50~70cm、長さ 4.5mほどの分厚い材などがゴロゴロあり、張られた値札は驚くほど安い。しかも押田社長の「昆虫館のためならさらに勉強します」との言葉に、大竹氏も俄然設計のモチベーションが上がる。この立派な一枚板ならあの重厚な古民家にぴったりだ。

■昆虫館の看板も無垢の皮つきの一枚板にしたいと思っていたが、こちらも選り取り見取りといった感じで、夢が膨らむ。秋のグランドオープンに向けて、追い風を感じる。

(寺章夫／2025年5月12日)

## 奥久慈 食べ録 ①



昆虫館の仕事で矢祭町に 11 回出張したが、その度に近くのお店で美味しいものを食べるのを楽しみにしている。テラ爺お勧めのお店を連載で紹介したい。

### 山田屋食堂

矢祭町東館桃木町 45

■去年の4月に初めて矢祭に古民家の下見に来た時に、地元の矢崎潤子さん(一般社団法人ニワトコ代表理事)から勧めていただいたうどん屋さん。定食や丼物からラーメンや餃子まである、懐かしい昭和の食堂だ。

■テラ爺の矢祭での記念すべき第1食目は「カレーうどん+半ライス(850円)」だ。歯応えのある手打ちの極太麺が、辛めのカレーにからんで、額の汗を拭きながら食べるのは絶品。「つけ汁鴨肉うどん」や冬の「鍋焼きうどん」も美味しい。

■その時、たまたま隣の席で食べていた二人の男性は、1時間後に古民家で再会することになり、その後昆虫館の改修工事でお世話になることになる郡山の八光建設のお二人だった。地元でも有名なお店のようだ。もっとも、矢祭にはお昼を食べられる店は数軒しかない。ちなみに昆虫館の国道を挟んで駐車場としてお借りしているのは山田屋さんの所有地とのこと。

■この3月から、いつ行っても暖簾が掛かってないので、聞くと高齢のご主人が体調を崩し、休店中との事。復帰されたら、あの辛いカレーうどんをまた食べたい。今度は半ライスを断らないで、汁をご飯にかけて食べてみよう。スプーンが付いてくる意味がわかった。



### 珈琲香坊

矢祭町小田川字中山 17-1

■昆虫館から歩いて3分ほどの、国道349号線に面した木造2階建てのヒュッテ風のお店。3月のプレオープンの時にオーナーの長谷川修司さんと名刺交換をしたが、今回の出張で初めて訪れた。小さなお店かと想像していたら、広くて明るい。カウンターの背面一杯の棚には色とりどりのコーヒーカップがずらりと並び、バーカウンターのボトル棚のイメージだ。

■人気店のようで、GWの最終日5月6日の昼前には店の前の駐車場にたくさんの車が並んでいた。16時過ぎに皆で昆虫館の打合せに行ったら、16時半で閉店という。矢崎さんがテイクアウトを頼んで、長谷川さんが一杯ずつ丁寧にコーヒーを淹れてくれた。

■そのコーヒーを昆虫館の母屋で打合せをしながら頂いたが、とても美味しくブラックにしてよかった。パック詰めアイスコーヒーを買ったが、これも美味しい。



■お店の名前「香坊」やインテリア、コーヒーパックのデザインなどどれもお洒落で、長谷川さんがこだわりを持ってお店を楽しんでいるのが伝わってくる。お店は奥さんと二人でやっておられ、2階がお住まいとの事。店内の空気がとてもきれいで、次回はお店のテーブルでゆっくり美味しいコーヒーを味わいたい。

■矢祭でこのような素敵なお店に出会えて少々嬉しい気分になった。お店の客さんに昆虫館を紹介してくれるそうだが、昆虫館に来られた方にもこのお店を勧めよう。

(寺章夫)

タイトル画像: 佐川家代々の屋号「やましよう」の屋号紋  
佐川家代々の当主の名前には「正」がつくと昆虫館事務局長の石射(旧姓佐川)正曜さんは言う。